

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その4

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失（思春期の喪失感情と結びつくもの）からニアザサードインパクトの引き起こしてしまったことに苦悩する中、カヲルの世界を取り戻すという提案でエヴァと一緒に乗り、槍を抜くことになったが、結果としてそれがフォースインパクトの引き金をひいてしまう。世界が崩壊していく様を目の当たりにする。

シンジは自分の犯してしまった過ちを痛感し、そのことに加え、これまで強い結びつきを感じてきたカヲルも死んでしまい、強い絶望感を抱く。シンジは絶望

の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

シンジは自身が犯してしまった罪の意識を感じるもどうすることもできず、周囲を迫害的に捉え、再び退行していくこともできない。妄想分裂ポジションに戻ることも抑うつポジションに進むこともできない。どちらの心性にもいくことができず、絶望の中で一人苦しんでいる。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そこでボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつの体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

→シン・エヴァンゲリオン 劇場版（以下 シン・エヴァと略）の冒頭のシンジは③の段階にある様に感じられる。

そこでシンジの心の成熟を進めていく（③→④の移行 または抑うつポジションへの移行）には、シンジ自身を受け止め、抱える環境が必要不可欠である。

2. シンジが目覚めた時、周囲の状況はどのような反応であったか？

（Qと同じテーマ）

絶望に打ちのめされていたシンジが目覚めると、犬は人に慣れた様子で嬉しそうに吠え、幼児は無邪気に好奇心を抱いて見つめていた。そして白衣姿のトウジが心配そうに接していた。周囲の人々もシンジを温かく迎え入れる。トウジの家では皆が食事を食べたり、お酒を飲んだりして和気藹々としていたが、シンジは部屋の片隅で一人離れた状態で両膝を抱え込んだままうずくまっていた。

しかし、皆シンジの存在を気にかけていた。

その食事会でトウジの義父はシンジが食事を摂らないことに怒鳴り出すが、それはシンジのことを考え、社会で関わっていくために大切な術を論しているようにも感じられた。そこからシンジの人格否定に発展していくことなく（怒鳴り出すと往々にしてそうなるものだが）、周りもきちんとフォローしていた。このように第三村の人々はシンジにとって大変受容的な環境を作っていた。

その点を Q と比較すると、Q では冒頭部の鈴原サクラが未確認生物のような対応をし、ミサトをはじめとする WILLE の人たちは殺伐とした雰囲気ですシンジを「みそっかす」扱いし、主体性が剥ぎ取られ、彼の存在を受け入れられていない空間となっていた。この点において対照的である。

【考察】

Q とシン・エヴァでは、対照的な描かれ方をしているが、どちらもシンジの孤立が描かれている。Q では周囲からの迫害的孤立である一方で、シン・エヴァでは周囲は受容的だが、シンジ自ら距離をとり、孤立している様に描かれている。

ここで、Q からシン・エヴァに変わる過程でシンジの心性は妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変化している様に感じられる。

妄想・分裂ポジションの迫害不安：外の誰か、何かしらの脅かし

→他者への恐怖であり、自身の内的な心の痛みではない 激しい崩壊の恐怖

抑うつ不安：悲哀、罪悪感、無価値、絶望、無力

→対象の喪失に伴う感情であり、対象喪失の事態に自分が関与した気づき

抑うつ不安が生じる背景には、自身の不完全さの感覚がある、それは自分の限界を知る感覚であり、万能感、万能空想の放棄→そこに悲嘆、無価値観、絶望感が生まれる。

→この取り巻く世界をシンジの心の世界を投影したものと捉えたとき、迫害から受容に大きく変わっている。けれどもシンジは（自責の念や贖罪の念を抱き苦しみがいている）その中でどの様に振る舞えばいいのか解らず、閉じこもっている様に感じられる。

なお、シン・エヴァンゲリオン 劇場版ではアスカがシンジに対して厳しく当たった様子が何度も描かれており、当初観た時は、そこまでしなくてもと思うほどであった。しかしアスカは Q においてシンジが目覚める前に敵と戦っている時に「なんとかしなさいよ……！ バカシンジ！」と呟いたり、Q の最後でアスカは「ガキシンジ。助けてくれないんだ。私を。また自分の事ばかり。黙ってりゃ済むと思ってる」と言い、もぬけの殻になって動けないシンジを安全な場所にまで連れて行っている。そこには彼女なりのシンジへの優しさであり、愛情表現の様に感じられる。

この様にシン・エヴァではシンジの心の成長に加えて、サイドストーリーとして二人の恋愛模様もこのアニメでは描いている様にも感じられる。

1) シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面 (Q と同じテーマ)

そしてその後のシンジとのやりとり

トウジの家庭の中に溶け込めないシンジをケンスケが引き取り、ケンスケ家に招かれ、シンジがその建物の中に入るとアスカが裸の姿で水を飲んでいたシーンを前回取り上げたが、このシーンは序でシンジが綾波の裸を目の当たりにし、赤面するシーンを彷彿とさせる。序では、シンジは綾波に心を開いたように描かれているが、ここではアスカに対して関心を示していない。さらに、DSS チョーカーに反応するのは、カヲルの喪失を受け入れられないことを示唆しているようにも見える（嘔吐はその象徴的にも思える）。つまり、綾波とは異なり、アスカはシンジを変える存在になっていないどころか、完全に存在をシンジにスルーされているように見える。それはアスカにとって、大きな衝撃であり、強い怒りを感じたと考えられる。

シンジに本当は受け止めてもらいたいアスカ。アスカ自身強がっているが、綾波を強く嫉妬し、心は弱く、孤独で寂しい。それ故に素直に自分の思いを表出できず、うずくまって何もできないままにいるシンジを疎ましく感じてしまう。

部屋の片隅でシンジはうずくまっているなか、アスカは辛辣な言葉を浴びせる。

アスカ「黙って隅っこに寝っ転がって、自分は辛いってアピールしたいだけでしょ。掃除の邪魔。マジ、うざい」

アスカ「もう、うんざり。それ、私らしんどいんだけど」

シンジは頭を抱えてうずくまっていたが、アスカの首元のD S S チョーカーが目に入り、たまらず嗚咽を漏らした。

シンジ「——うっ」

アスカ「また吐くか」

アスカはテーブルの上のレーションを掴み取ると、シンジを強引に仰向けにさせる。

アスカ「ガキが！ こうして飯を食わせてもらっただけで、ありがたく思え！」

相手の胸ぐらを掴み、レーションを口に押し付け、罵倒を浴びせる。

アスカ「まだあんたはリリンもどき、食べなきゃ生きていられない。だから食べえ！ こちとらずっと水だけだ！ 何も変わらない体になる前に、飯のまずさを味わっておけ！ バカガキ！ そうやって何もしないのも、自分がまた傷つくのが嫌ってだけでしょ！ どうせ暇なら、せめてあのとき、なんで私があんたを殴りたかったのかぐらい、考えてみろ！」

レーションを掴み取り、シンジの口にねじ込む。

アスカ「あんた、メンタル弱すぎ。どうせやることなすこと裏目に出て、取り返しがつかなくなかって、全部自分のせいだから、もう何もしたくないってだけでしょ。親の言いつけとはいえ、その程度の精神強度だったら、そもそもエヴァに乗らないで欲しかったわ」

そう言って、シンジの体を乱暴に突き放したアスカは、その場から離れた。

じっとしていたシンジは、突然、身を起こすと、そのまま部屋から出て行ってし

まう。

アスカ「一人で拗ねてろ。ガキ」

ケンスケが仕事を終えて戻ったときのシーン。アスカは携帯ゲームをしている。

ケンスケ「ただいま。あれ、礎は？」

アスカ「家出した」

ケンスケ「そうか。今は一人にしておくのが、最適解かもしれないな。家出先は？」

アスカ「北の湖の廃墟」

ケンスケ「ネルフ施設の跡地とは、それも縁か。レーションは？」

アスカ「無理やり食わせた。しばらく持つでしょ」

ケンスケ「ありがとう、式波」

アスカ「別に、あいつのためじゃない。自分勝手に死ぬのは、この私が絶対に許せないだけよ」

【考察】

アスカは、シンジのことを彼女なりに考えているものの、歪んだ形でしか表出できなくなっている。シンジとアスカの関係は、シンジとアスカの関係はサド・マゾ的、支配・被支配の関係になっており、ある種、肛門期的関係であり、成熟した恋愛関係とは言い難い状況にある。シンジがケンスケの家を飛び出したのは、この歪んだ関係が続き、対等な関係になれないと感じ、咄嗟に起こした行動と思われる。

後に帰って来たケンスケは、ある意味、アスカとシンジの関係が決裂してしまったことを理解している。彼はどちらを責めるわけでもなく、シンジ、アスカどちらに対しても暖かく見守っているのが、非常に印象的である。

その後、綾波（そっくりさん）が市井の人々との関わりが描かれていく。

綾波をシンジの写し鏡と捉えたとき、それは今までとは違った、新しいものを取り入れ、再建の段階にシンジの心は進みつつあるのではないかと考えられる。つまりその後の綾波の変化はシンジの心の変化を表している様に感じられる。

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変ったか？

シンジがうずくまって殻に閉じこもる一方で、綾波は市井の人々と関わり色々なことを素朴に尋ねていき、徐々に新たな発見をしていく。

1) 委員長（ヒカリ）が授乳をしているところで、綾波が色々尋ね、自分には授乳ができないことを知り困惑するシーン

綾波：分からない。綾波レイなら、どうするの？

委員長：あなたは、綾波さんとは違うんでしょ？ だったら、自分で思ったことをすればいいの

レイの瞳が見開かれた。今まで考えようとしなかった設問に、彼女はしばし無言になる。

綾波：違って、いいの？

2) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 1

「風呂って不思議。LCLと違って、ポカポカする」

「私、命令がないのに生きてる。なぜ？」

3) 親子が、手を取り合う姿を見て綾波が問うシーン

綾波：あれは、なに？

委員長：そうね、仲良くなるためのおまじない

そう言うと委員長はそっと右手を差し出し、綾波は右手を、そこに重ねる。

4) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 2

綾波：私の名前？

人々1：うん。いつまでも“そっくりさん、”というわけにもいかんからねえ

人々2：先生の話やと、自分の名前を忘れとるそうやけど、じゃったら自分で新しく付けたらどうなの

綾波：名前、付けていいの？

【考察】

綾波は色々な集落の人々に色々なことを尋ね、彼ら彼女らの言葉一つ一つに心揺さぶられていくが、それだけ彼女を取り巻く外界が新鮮に感じられ、新しい発見の連続であるかの様に描かれている。それは今まで「命令に従う」という受け身的（超自我に支配されていたともいうべきか？）であった綾波が徐々に主体的、能動的になり、積極的に外界の刺激を取り入れようとしている様に感じられる。1）から4）にかけて時系列的に綾波の言動を列挙したが、分離个体化し、徐々に他者と関わりを持ち、自身に主体性が立ち上がっていく様を描いている

ように感じられる。とりわけ4)の名前をつけるということは自身のアイデンティティを持つことであり、確固とした自我を持ち、主体性の立ち上がりを象徴しているように感じられる。

(cf 千と千尋の神隠し)

そしてこの綾波の心の成長に関して、綾波とシンジを表裏一体と考えたとき、シンジの心の成長を描いているとも考えられる。また、綾波の心の成長の一方で、うずくまったシンジと一緒にいて、常に苛立ちを隠せないアスカのシーンは対照的である。

そして心が成熟した綾波とシンジが交流し、シンジに心の変化が生じる。

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

1) まず、綾波とシンジの対話

綾波：碇君はなぜ、村に戻らないの？

綾波：碓君も、ここで何もしてない。あなたもこの村を守る人なの？

シンジは微動だにせず膝を抱えて座っている。そしてなにか今まで貯めていた思いを吐き出すかの様に激しい口調でいう。

シンジ：守ってなんかいない。何もかも僕が壊したんだ。もう何もしたくない。

話もしたくないんだ。もう誰も来ないでよ！ 僕なんか、放っておいてほしいのに！

シンジ：なんでみんな、こんなに優しいんだよ

綾波：碓君が好きだから

シンジは、はっと息を呑んでレイの方へ振り返った。

綾波：ありがとう。話をしてくれて。これ、仲良くなるための、おまじない

綾波はシンジを見つめ、そっと右手を差し出す。シンジは堪えきれずに、嗚咽して泣き出す。

【考察】

ここは心が成長した綾波がシンジを包み込んでいる。シン・エヴァではシンジを取り巻く人々は、皆、彼に対して温かく優しく接していたが、それゆえにシンジは自分が犯した罪は決して許されるものではないと考え、殻に閉じこもっていたように感じられる。けれども本当はシンジは自分のその苦しい思いを受けてめてほしいし、共有したいと感じていたように感じられる。

「誰も来ないでよ」「放っておいてほしい」と強く言ったシンジだが、自分の苦しみなんて、結局誰も受け止めてくれやしない、触れられて、これ以上傷つきたくないからこそ放った言葉であったと考えられる。

だからこそ綾波の言葉「碓君が好きだから」「ありがとう。話をしてくれて。」

という言葉は非常にシンジの心を揺さぶったのではないだろうか？

→シンジは心を閉ざすことをやめ、トウジやケンスケが暮らす生活に入り込んでいった。それはシンジが現実世界を受け入れ、今後立ち向かうであろうシンジのエディプス葛藤への第一歩を踏み出したとも考えられる。

2) シンジはケンスケに連れられて、ケンスケの父の墓参りをするシーン。

ケンスケ：ありがとう。朝から付き合ってくれて

ケンスケ：ニアサーを生き延びた親父が、まさか事故であっさり死ぬとは、その時はまるで思わなかったな。こんなことなら、ちゃんと話をして、酒でも飲んで、愚痴の一つも聞いたときゃよかったよ

ケンスケ：お前の親父は生きてるだろ？ 無駄と思っても一度は会って、きちんと話せよ。後悔するぞ

アスカ：そんなのこいつには重いわよ。あの碇ゲンドウじゃ

ケンスケ：しかし、親子だ。縁は残る

【考察】

ケンスケの言葉。ここでは次のテーマの導入として描かれているように感じられ

る。抑うつポジションへの心性を語る。そしてエディプス葛藤にシンジが向き合
おうとする前振りの様に感じられる。

ケンスケの父の墓でお参り→父を乗り越えて一人の成熟した大人になったケン
スケの姿（父親殺しの象徴）

3) 綾波の喪失

綾波：おはよう

シンジ：おはよう。どうしたの、こんな朝早く

綾波：碇君に会いたかった

シンジ：これ

黒い音楽プレイヤーをシンジに差し出した。

シンジ：あ、ありがとう

シンジ：あの、頼まれていた名前なんだけど——綾波は綾波だ。他に思いつかない

綾波：ありがとう。名前、考えてくれて。それだけで嬉しい。ここじゃ生きられない。けど、ここが好き

シンジ：綾波？

綾波：好きって分かった。うれしい

シンジ：綾波、どうしたの？

綾波：稲刈り、やってみたかった

綾波：ツバメ、もっと抱っこしたかった

綾波：好きな人と、ずっと一緒にいたかった

綾波：さよなら

シンジ：綾波！

別れの言葉の直後、レイは息を引き取るように瞳を閉じ、綾波は爆発し、そこには LCL に濡れたプラグスーツのみがあり、シンジはそのプラグスーツを抱いて静かに泣き出す。

→綾波との対話後、綾波喪失　そこでシンジは再びエヴァに乗る決意を固める、